



Title	組織的キャンプにおける女子学生の自己概念変化の要因について
Author(s)	星野, 敏男
Citation	明治大学教養論集, 155: 59-76
URL	http://hdl.handle.net/10291/4907
Rights	
Issue Date	1982-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

組織的キャンプにおける女子学生の 自己概念変化の要因について

星 野 敏 男

I 目 的

組織的なキャンプの効果に関する研究は、すでに各方面からなされている。青年期における組織的キャンプでは、キャンプ参加者が①自然との関係、②他人との関係、③自己との関係の中で自己をみつめ、それを開発、拡大していくことを大きな目的としている。

近年、キャンプの教育的効果を測るためのひとつの指標として、本人が自分自身をいかに意識しているかという、現象的自己、すなわち自己概念が取りあげられている。野外活動や運動への参加経験が自己概念の変化に影響を与えるという報告は、南⁽¹⁾ (1971)、野沢⁽²⁾ (1976)、川村⁽³⁾ (1979)、中込⁽⁴⁾⁽⁵⁾ (1978, 1979)、井村⁽⁶⁾ (1980)、等の研究によってすでにいくつか報告されている。しかし、自己概念の変化がどのような場面、状況等に影響を受けているのかという点では未だ明確な結論が出されていない。

本研究は、これらの研究をふまえ、キャンプ経験による自己概念の変化、性格特性と自己概念の変化との関係、キャンプを通して自己洞察がなされたと考えられる者（高自我関与群）とそうでない者（低自我関与群）との自己概念の変化の関係を明らかにし、さらにキャンプ参加者の感想文をもとに、自己概念の変化に及ぼす要因をキャンプ・プログラムやキャンプ・カウンセラーとの関

連から検討しようとするものである。

II 方法

1. 対象

実験群：東京都内女子短期大学の一般体育キャンプ実習参加者のうち、すべての実験条件を完了し、調査用紙の揃っている者79名

統制群：同女子短期大学一般学生83名

2. キャンプ実習について

キャンプ実習は、昭和55年9月20～24日の4泊5日、長野県戸隠高原にある組織的キャンプを目的に作られたキャンプ場で行なわれた。キャンプ参加者は、1班8～10名の計8班に分けられ、各班に大学教官あるいは、野外教育を専攻する大学院生がキャンプ・カウンセラーとして指導にあたった。指導スタッフはキャンプ・カウンセラー8名の他、本部スタッフ5名の計13名で構成された。

図1 キャンプ・プログラム

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
午前		冒険オリエン テーリング	登山 標高差約 700m	お好み活動 ・そば打ち ・野鳥観察 ・草木染 ・笹茶づくり ・スケッチ他 各自で選択	撤収 解散
午後	設 営	キャンプクラ フト 食事コンテス ト			
夜	歓迎キャンプ ファイヤー	祭 り	星見会	キャンプ・ファ イヤー	

キャンプ・プログラムは図1に示した通りであるが、プログラムの決定にあたってはキャンプ1日目は参加者の不安や緊張感を取り除くように、2日目は班の協力、連帯感が高まるように、3日目は自己の能力、体力に挑戦し、それを克服するように、4日目は自然とのふれあいの中で自己を見つめることがで

きるようにと、それぞれキャンプ全体の流れを考え、プログラムを決定した。

3. 手続

(1) キャンプ経験による自己概念の変化を調べるために、長島等⁽⁷⁾⁽⁸⁾(1965, 1966)の作製した自己概念スケール (Self-Differential Form A) (図2) を用い、実験群にはキャンプ2カ月前、キャンプ直前、キャンプ終了直後、キャンプ終了1カ月後の計4回、統制群には、キャンプ2カ月前とキャンプ終了1カ月後の2回、それぞれ調査した。

(2) キャンプ参加者の性格特性を把握するために、モーズレイの性格検査 (MP I) を用いキャンプ直前に調査した。

(3) キャンプ期間中の自我関与の程度をみるために、キャンプ期間中毎夜、就寝前の20~30分間を利用し、その日1日の活動をふり返って感想文を書かせた。その際、各自のとった行動についてできるだけ具体的にあげさせ、どうしてそのような行動をとったのか、それについてどう考えたのが等について、各自に自己分析を試みさせた。また、キャンプ終了1カ月後に「キャンプ前の私とキャンプ後の私」というテーマで作文を課した。

自我関与の程度の判定は中込等 (1979) の行った方法の判定基準 (図3) に準じ、それぞれの項目において、見られない—やや見られる—見られる、の3段階に分け、各々0点、1点、2点に評定した。評定者は筆者を含む2名で、評定の四つの観点について理解を深めるよう充分協議した後、それぞれ別々に評定し、2人の合計点を自我関与の得点とした。したがってキャンプ参加者1

図3 感想文の判定基準

(1) キャンプへの取り組み方に変化がみられたかどうか
(2) キャンプ中に、興奮あるいは感動した局面があったかどうか
(3) 印象的な自己認識がなされることがあったかどうか
(4) 自己同察がなされているかどうか

判定基準—見られない—やや見られる—見られる
(0点) (1点) (2点)

人の自我関与の得点は最低0点から最高16点となる。なお、2人の評定者による評定得点を検定した結果、0.73という高い相関が得られた。

III 結果と考察

1. キャンプ参加者の自己概念の変化

長島らの作製した自己概念スケールは47項目からできており、それらは、I因子（向性因子）、II因子（情緒安定性因子）、III因子（強靱性因子）、IV因子（誠実性因子）、V因子（過敏性因子）、VI因子（理知性因子）の6つの因子構造からなりたっている。ここでは実験群の自己概念の得点を各因子ごとに集計し、4回の測定結果について分散分析を行い、その変化について検討を行った。（表1～6）その結果、表3に示すように第III因子（強靱性因子）において有意差が認められた。（ $F=3.871$, $P<0.05$ ）また、この第III因子においてはキャンプ直前—キャンプ直後（ $t=2.55$, $P<0.05$ ）キャンプ直前—キャンプ終了1カ月後（ $t=2.28$, $P<0.05$ ）に有意差が認められ、キャンプ2カ月前—キャンプ直前には有意な差が認められないということが明らかとなった。すなわち、強靱性因子における変化はキャンプによるものであるということができる。これはキャンプ経験によって、弱い→強い、臆病な→勇敢な、消極的

表1 分散分析表 第I因子（向性因子）

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	38.98	3	12.99	0.2559
誤 差	15641.97	308	50.78	
全 体	15680.96			

表2 分散分析表 第II因子（情緒安定性因子）

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	10.83	3	3.611	0.1378
誤 差	8066.53	308	26.190	
全 体	8077.37			

表 3 分散分析表 第Ⅲ因子 (強靱性因子)

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	383.09	3	127.69	3.871*
誤 差	10162.22	308	32.99	
全 体	10543.32			

※P<0.05

表 4 分散分析表 第Ⅳ因子 (誠実性因子)

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	11.39	3	3.79	0.124
誤 差	9394.91	308	30.50	
全 体	9406.30			

表 5 分散分析表 第Ⅴ因子 (過敏性因子)

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	10.84	3	3.61	0.589
誤 差	1890.02	308	6.1364	
全 体	1900.87			

表 6 分散分析表 第Ⅵ因子 (理知性因子)

	平方和	自由度	平均平方	F
主 効 果	7.35	3	2.45	0.314
誤 差	2404.58	308	7.80	
全 体	2411.94			

な→積極的な、無気力な→意欲的な、等の強靱性の項目において、社会的に望ましい方向に変化し、それが1カ月後にも有意に影響していることを示している。各因子の中で強靱性の項目において変化がみられた原因についてはプログラムの影響が大きいと考えられる。4泊5日のあいだ、かまどの火おこしをはじめとして、食事の準備やプログラムなどすべて自分達の手で解決していか

ければならないという生活を通じ班員同志の連帯感や班意識が高まり、それがキャンプに対する取り組み方を意欲的、積極的な方向に変化させていくとともに、登山などの苦しい活動を克服した自信などが強靱性の向上をうながしたものと考えられる。

2. 性格特性と自己概念の変化

ここではキャンプ参加者の性格特性が自己概念の変化にどのような影響があるかを検討した。性格特性の検査には、モーズレイの性格検査 (MP I) を使用した。モーズレイ性格検査は外向性、内向性という向性 (E) を測定する項目と神経症傾向 (N) を測定する項目とからできている。

表7は実験群におけるキャンプ前後の自己概念の変化量の絶対値と向性、および神経症傾向との相関を各因子ごとに示したものである。表の結果からもわかるとおり向性および神経症傾向と自己概念の変化量には有意な相関はみられなかった。すなわち、このキャンプにおいては、自己概念に影響を及ぼす要因として性格特性をあげることはできないと考えられる。

表7 MP Iによる性格特性と自己概念の変化量との相関 (r)

	向性 (E) n = 79	神経症傾向 (N) n = 79
I 因子	r = -0.132	r = 0.147
II 因子	r = 0.216	r = 0.158
III 因子	r = -0.056	r = 0.080
IV 因子	r = -0.174	r = -0.076
V 因子	r = 0.225	r = 0.084
VI 因子	r = 0.085	r = 0.044
全 体	r = 0.004	r = 0.217

3. 自我関与と自己概念の変化について

ここでは、先に述べた判定基準をもとに2人の評定者で行った判定結果から、自我関与が高いと評定された者12名 (評定得点12点以上、これを高自我関

与群とよぶ), 自我関与が低いと評定された者13名 (評定得点3点以下, これを低自我関与群とよぶ) を抽出した。そして両群における自己概念の変化量の絶対値を平均し, その差を t 検定した。(表8)

表8 自己概念の変化量の絶対値による両群の比較

	高自我関与群 n = 12		低自我関与群 n = 13		t 値
	M	S D	M	S D	
I 因子	3.66	1.92	2.15	1.06	2.458※
II 因子	4.75	4.09	2.46	3.30	1.538
III 因子	6.08	4.14	1.92	1.80	3.302※※
IV 因子	4.50	3.34	3.00	2.00	1.374
V 因子	1.83	1.69	1.30	0.94	0.803
VI 因子	4.09	2.62	2.00	2.67	1.502
全 体	11.75	7.70	7.38	6.92	1.493

※P < 0.05 ※※P < 0.01

その結果, 第I因子 (向性因子) において5%水準, 第III因子 (強靱性因子) において1%水準でそれぞれ有意な差が認められた。他のすべての因子においても高自我関与群の変化量が大であり, このキャンプにおいては, 自己の内面に深くかかわっていたと思われる高自我関与群の方が, そうでない低自我関与群より自己概念の変化が大きいということが明らかとなった。

本研究は, キャンプの教育的効果を探るためのひとつとしてキャンプ参加者の自己概念を取りあげ, その変化, 性格特性との関係等を検討してきた。自己概念の変化では特に第III因子において社会的に望ましい方向への顕著な変化が見られ, また全体の自己概念の変化量を検討した結果, キャンプ生活中に深く自己とのかかわりを持ったと判定された者 (高自我関与群) のほうが, そうでない低自我関与群より自己概念の変化量が大いということが明らかとなった。

すでに述べたように, 野外活動や運動への参加経験の教育効果を測るためのひとつの方法として, 参加者の自己概念を取りあげその変化を検討するという

方法がとられている。中込等はスキー実習中の体験過程と自己概念の変化とに関する研究報告の中で「スキー実習中の自己概念の変化では一貫して高自我関与群において大きな変化量を見ることができた。」と述べている。本研究の結果においても高自我関与群の方が低自我関与群より変化が大きいという結果が得られた。これは中込等の研究結果を支持するものである。今回の研究結果はキャンプ実習を対象に行なったものであるが、スキー実習、キャンプ実習いずれの場合も同じように高自我関与群の自己概念の変化が大きかったことを考えると、スキー実習やキャンプ実習の指導に際しては、これらの活動体験を通して、より積極的に自己を見つめるような機会を作り出していく必要があると思われる。

4. 感想文から見た高自我関与群の自己概念の変化に及ぼす要因について

高自我関与群の自己概念の変化が大であったことはすでに述べた。すなわち、高自我関与群の方がそうでない低自我関与群よりも自己概念の変化が大きかったということは、キャンプ期間中積極的に自己を見つめていた者ほど自己概念の変化が大きかったとすることができる。それでは、高自我関与群が積極的に自己を見つめるきっかけとなったものは何であったのか、ここではこれら高自我関与群のキャンプ実習期間中の毎夜の感想文、およびキャンプ終了1カ月後の作文をもとにキャンプ・プログラム等との関連から検討を進める。以下にとりあげた「 」内の文章は、高自我関与群12名の文章の一部を抜粋したものである。文章中に出てくるカウンセラーとはキャンプ・カウンセラーのことであり、心理学でいうカウンセラーとは多少異っている。

〈初日の感想文〉

「不自由ですべてが日常生活と違い、手間がかかった。寒いので心配、肉体労働が多くて疲れた。」「キャンプに来るまでいやでいやで泣き出しそうになったけど、1日目の夜を迎えた今、来てよかったと思う。」「来るまでゆううつだったが何とかやっていけそうな気がする。つくづく自然の中にいるの

を感じさせられた。」「キャンプ・ファイヤーの火を見ていて、初めて火を見たような気がした。」「御飯を食べている時暗くなってしまうととてもさみしくなったが、キャンプ・ファイヤーで元気が出た。」「期待と不安でいっぱいだったが、カウンセラーや先生の陰の力を感じ、今はつらくても後で笑って思い出せると信じがんばります。」「知らない人ばかりで自分がどう対応できるか少々不安だったが、みんな明るいので4泊5日楽しく過せそうな気がする。」

キャンプ実習第1日めのこの日は、プログラムとしては開講式、オリエンテーション、設営（テント、かまど、テーブル）、食事、夜の歓迎キャンプ・ファイヤーが行なわれた。感想文から判断する限りにおいては、話をしたことのない仲間とキャンプ場で4泊5日を過すことに対する参加者の不安や緊張感は、この日の夜までには殆んど取り除かれていると思われる。文章内には、初日のせいか、自分がキャンプ場に着くまで不安や心配に思っていたことに関する内容が多く、まだ自己を見つめているような内容の文章はみあたらない。

〈2日めの感想文〉

「今日のオリエンターリングは本当に楽しかった。これで班の団結がバッチリできた。」「今日はグループの人たちが協力してやる行動がとても多く、友達との友情も深まったと思う。」「オリエンターリングはとてもつらかったが、いやな苦しみのおあとは絶対いいことがある。明日もみんな協力してすばらしい1日にしよう。」「私は縁の下の力持的存在だと思う。一番つらくて大変だが大切な役割だと思う。」「今日のようにみんなが協力していけばこれからはもっとうまくいくと思う。夜、みんなのいろんな話を聞けてとてもよかった。」「私の班のチームワークの良さは、みんなが『何かすることない？』と仕事をさがそうとする心から生まれていることに気づいた。」「今日のオリエンターリングは最高だった。一人一人の協力がなかったらこの気持は味わえなかったと思う。」

この日の文章にあらわれてくるオリエンテーリングとは、我々キャンプ・スタッフが冒険オリエンテーリングと名づけたものであり、地図上のコースの各ポイントごとに、班員同志の協力がなければ絶対に達成できないような身体運動を伴う課題を10ヶ所程設定したものである。(例えば2 m30cm くらいの高さの壁を全員が向こう側に乗り越えること……最初の数人は全員の協力で容易に乗り越えることができるが最後に残った2人又は1人をどうやってその壁を越させるかでさまざまな工夫や協力体制があらわれてくる。) この日はこの他にも班の協力、連帯感等を高めるようなプログラムとして、班対抗でアイデアや味を競いあう食事コンテストやキャンプ祭りなどのプログラムを組んだ。2日目の班員同志の協力、連帯感を高めるという目標は、文章内容からある程度達成できたと考えられるが、この日の文章では「私は縁の下の力持的存在だと思ふ～」という文章があらわれてきてはいるものの全体としては自己を見つめるような内容の文章はまだ見あたらない。

立山、御嶽山

〈3日目の感想文〉

「つらい登りだったが後で後悔したくないと思い自分に問いかけながら登った。登りきって今、本当によかったと思う。精神的にひとまわり強くなったような気がする。」「途中かなりつらくて、もうダメ、と言いつつになったけど、頂上まで登りきればきっと私自身の心の中に何かが残るような気がして、一生けんめいがんばった。登りきって自分に何が残ったかわからないけど、今までボケーと生活してきた私にとって何かちがう、『生きてるな』という感じがもてた一日だった。」「こんな高い山を登ったのは初めてで、とても苦しかったが満足している。本当によく登ったと自分自身を尊敬している。」「大変な登りだった。体力に限界を感じていたが、やればできるという自信がついた。」「登りはつらくて、何度もダメになりそうになったけど、班の人と声を出したり、助けあってがんばって登れた。はじめて山登りの喜びを感じ、人と人とのふれあいを感じた。」「登山の時、はじめはグチばかり口に出してしまった。自分の感情を表に出さず、他人のことを考えてくれる人

を尊敬してしまった。」「思いやりのある本当の励ましの言葉をかけられなかったことがとても恥かしいことだと思った。」

この日は、自己の体力や能力に挑戦するプログラムとして登山を実施した。標高差は約700mで登り約4時間、下り3時間である。登りのペースはそれぞれ班員の体力やコンディションに応じて、班担当のカウンセラーが責任を持ち、班単位の全員登頂を目標とした。3～4時間の時間をかけて山に登ったことがあるという経験のある者は参加者の中には殆んど見あたらず、文章からもこの日の登山が本人にとって相当苦しいものであったことがうかがえる。この日の文章には、苦しい登山に打ち勝つことができた自己の能力の発見や驚き、励ましてくれた友人への感謝の気持などが述べられており、登山という活動が自己を見つめるひとつのきっかけとなったことがうかがえる。

〈4日めの感想文〉

「4日間、苦しいことがあったけど、カウンセラーから私にとっても皆にとっても、価値のある話が聞けて私の心の中にひっかかっていたことが表面に出せて気持よくなった。さわいで楽しむことだけでなく、心の奥にまでふれて話しあう大切さを教えられ、自分で学べた。このキャンプに、そしてカウンセラーに感謝したい。」「私はいつも自分に対して素直になれず困っていたが、カウンセラーの話を聞いて自分の心を素直に話すことができた。この経験を自分の改善に役立てたいと思う。」「こういう自然の中にいると誰にでも自分の心を開くことができる。今の社会は自分だけが良ければいいという人が多いのでこういう機会を持って心を開き話しあうことはとても大切なことだと思った。」「このキャンプで私の知らなかった一面、友達の知らなかった一面をみることができました。今の私に足りないことは、がまん、と思いきや、だということがわかりました。」「今までわがっていたと思う点をあらためて自覚させられました。少し内面が豊かになったような気がします。」

「このキャンプでは毎日毎日反省させられる点が多い。なんとダメな人間だ

ろう。イヤなことをさげようとしている自分が恥かしい。明日こそは思っても実行が伴わない私でも、ほんの少しだけ変ってきたように思える。」「今までのキャンプを通して何か変わったけど、自分が良くなったとは思えません、キャンプで自分のイヤな面、醜い面をいやというほど知りました。私は都会の中で自分がどんどん純粹さを忘れて汚なくなっていくのがイヤです。いろんなことで強がりを書いていたけど自分がエゴイストであることに気づきました。もう逃げるのはやめようと思います。そう思う勇気ができました。」

この日の活動は、スタッフやキャンプ・カウンセラー一人一人が主催するプログラムに、それぞれキャンプ参加者が自分で選択し参加する「お好み活動」と4日間の最後のまとめである夜のキャンプ・ファイヤーが行なわれた。お好み活動は草木染め、スケッチ、草花観察、野鳥観察など、自然とのかかわりあいの中で自分を見つめられるようなゆったりとした、静的な活動が多い。また、キャンプ・ファイヤー終了後は、それぞれの班のテントでキャンプ・カウンセラーを交え、キャンプ中考えたこと、自分自身の反省などについて充分話し合えるような場を設定した。この日の感想文には自分に問いかけたり、自己を見つめた内容の文章が多く、高い自我関与がなされていることがわかる。また、これらの自我関与にはキャンプ・カウンセラーの影響が大きいということも文章の中からうかがうことができる。

〈1カ月後の感想文〉

「たった5日間のキャンプでしたが得るものは大きかったと思います。オリエンテーリングではみんなの協力がなければ絶対に不可能だということを感じさせられ、登山では、私にもまだ根性と体力がしっかりあることを確認できました。班の仲間やカウンセラーとの話しあいのなかから、自分の性格や程度をもう一度見つめなおすことができ、もっと積極的に友達を作ろうと思ったり、もっとユーモアのある人間になりたいと思いました。学校が

始まってから私は常に自分について考えるようになりました。」「カウンセラーたちから多くのことを学びました。一人一人の一生けんめいの姿をすごく美しく思うようになりました。」「私は以前から人と人の間には目に見えない壁があり、その隔たりで文明社会が成立していると思っていたが、キャンプで必ずしもそうではないということがわかった。目に見えない壁を突き破るには、素直さと信頼を持って相手に接していかなければならないということがわかった。」「今まで妥協することに慣れてしまっていたが、登山を終わってから、苦しくてつらいことでもやればできるということがわかった。山登りのように一步一步着実に前進していけば今までとは違った生活を送ることができると思った。」「班の中には明るい人、積極的な人、リードする人など、それぞれ自分にはないすばらしい面を持っている人が沢山いて、私もこういう人たちのいいところを取り入れ、自分を改善していかなければならないと痛感した。特にカウンセラーには、いろいろな有益な話をしてもらい感謝している。」

この文章は、キャンプ終了1カ月後に「キャンプ前の私とキャンプ後の私」というテーマでキャンプ参加者に課した作文からの抜粋である。ここでもキャンプ中、自己を見つめるきっかけとなったものとして、登山、キャンプ・カウンセラーをあげていることがわかる。

以上がキャンプの第1日めから第4日めまで、それと1カ月後の高自我関与群の文章である。これら高自我関与群の文章内容の共通点としては、キャンプ期間中日を追うごとに自己を見つめる内容の文章が増えていったこと、特に登山やキャンプ・カウンセラーとのかかわりあいの中から自己を見つめる機会を持ったということがあげられる。

(9)
西平(1964)は集団の中で自己を分析する方法として、(1)他人の前で自分について発言する、(2)発言している自分自身を見つめる、(3)他人がそれぞれ自己をどうとらえ、同時に「私」をどう見ているかを知る、などのいわゆるバズ・

セッションを取りあげている。4日めの夜はキャンプ生活最後の夜でもあり、キャンプ・ファイヤー終了後の話しあいは、お互いがお互いの心を割って話し合うという、バズ・セッション的な話しあいを持つことのできる絶好の機会でもある。しかし、バズ・セッション的な話しあいをするためには班員一人一人の間にそれを受け入れるための心の準備が必要である。このような受け入れ態勢、雰囲気を作り出していくためには、登山のように自己の能力へ挑戦するようなキャンプ・プログラムの影響ももちろん大きいと考えられるが最も大きな影響を与える役割をになっているのはやはりキャンプ・カウンセラーであろう。カウンセラーによっては、班員一人一人の内面に触れることなく話しあいを進めていく場合も考えられるし、また逆に、登山の後にその日の苦しさをのりこえた自分というものを考えさせるような機会を積極的に作り出していくことも考えられる。今回、感想文の評定結果から、自我関与が高いと評定された者が2～3の班にかたよる傾向が見られたのはこのような理由によるものと考えられる。

すでに述べたように、本研究におけるキャンプ・カウンセラーは心理学でいうカウンセラーとは異っている。しかし、キャンプ・カウンセラーは単にキャンプ生活での生活技術や知識を指導するだけでなく、キャンプ参加者とお互いに心を割って話しあい、助言、指導し、そうして築きあげた信頼関係を通して、キャンプ生活の中であらわれてくる参加者のさまざまな問題をともに考え、解決していくことを要求されるものである。その意味では、心理学におけるカウンセラーと共通部分が多いといえる。

キャンプ・カウンセラーの資質や、キャンプ・カウンセリングに関してはさまざまな見解が述べられているが、今回、評定の結果から、高自我関与群が特定の班にかたよっていたこと、また、その班のカウンセラーは積極的に班員と心を割って話しあい、いずれもキャンプ最終日の夜の話しあいはバズ・セッション的な方法で話しあいをすすめていったということは、今後のキャンプ・カウンセラーのあり方を考える上でのひとつの示唆を与えるものと考えられる。

教育の中でキャンプをとりあげる場合、自然環境や日数との関係で必然的に

プログラムは限られたものになってくるが、組織的キャンプの目的が自己の開発、拡大であることから、これらのプログラムを考える場合、単なるプログラムとしての登山や形だけのキャンプ・カウンセラーではなく、キャンプ全体の流れの中でそれぞれのプログラムが持つ意義、またそのプログラムがキャンプ参加者に与える影響や役割、教育的効果といったものを充分検討していく必要があると思われる。特に青年期の女子学生、生徒を対象とするキャンプにおいては、単なる楽しさの追求や生活技術、知識の指導に終わるのではなく、仲間との会話や活動プログラムを通じて、自己を見つめていくことができるようなプログラムや話しあいの場を積極的に与えていく必要があると思われる。

IV 要 約

女子学生を対象とした4泊5日のキャンプにおいて、キャンプ参加者の自己概念の変化を中心に検討をすすめ、次のような結果を得た。

(1) 長島等の作製した自己概念スケール (Self-Differential Form A) を用い、キャンプ実習前後計4回調査を実施し、その変化を検討した。その結果、第Ⅲ因子である強靱性因子においてキャンプ前後の有意差が認められた ($P < 0.05$) また、キャンプ直前—キャンプ終了1カ月後にもそれぞれ5%水準で有意差が認められ、キャンプ終了1カ月後にも有意に影響しているということが明らかとなった。

(2) モーズレイの性格検査を用い、自己概念の変化との関係を検討した結果、向性、神経症傾向と自己概念の変化量とのあいだには有意な相関は得られなかった。すなわち、このキャンプにおいては、自己概念の変化に及ぼす要因として性格特性をあげることはできないと考えられる。

(3) キャンプ中の毎夜の感想文とキャンプ終了1カ月後の作文をもとにして、実験群を積極的に自己洞察がなされたと考えられる高自我関与群とそれのみられない低自我関与群とに分け、自我関与の程度と自己概念の変化との関係を見た。この結果有意な差が見られたのは第Ⅰ因子(向性因子 $t = 2.458$; $P < 0.05$)、第Ⅲ因子(強靱性因子 $t = 3.302$, $P < 0.01$)であったが、他のす

すべての因子においても、高自我関与群の変化量が大きであった。

(4) 自己概念の変化の要因をさぐるため、高自我関与群の毎夜の感想文と1カ月後の作文とを検討した。その結果、自己概念の変化に影響を及ぼしたと考えられる内容の文章が特に3日めの登山、4日めのキャンプ・カウンセラーとの話しあい等に関して多くみられた。また自我関与の高かった者の班では、いずれもキャンプ・カウンセラーが中心となってバズ・セッション的な話しあいが持たれていたことが明らかとなった。これらのことから、本キャンプにおいては、女子学生の自己概念の変化に及ぼす要因のひとつとして、登山やキャンプ・カウンセラーをあげることができ、特にキャンプ・カウンセラーによるキャンプ参加者への働きかけが自己概念の変化に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

現在、教育場面では、さまざまなキャンプ実習が行なわれている。教育的組織キャンプの目的が自己の開発、拡大にあり、また、本研究の結果から、高自我関与群の自己概念の変化が大きであったことを考えると、キャンプにおいて、自己をみつめるような機会を積極的に与える必要があると思われる。また、そのためには、キャンプ・プログラムや、キャンプ・カウンセラーを考える場合、キャンプ全体の流れの中で、それぞれがキャンプ参加者に与える影響や役割、教育効果といったものを充分検討していく必要があると思われる。

(附記) 本研究は、筆者の他、川村協平(山梨大学)、橋直隆(中京女子大学)と共同ですすめている女子学生のキャンプ効果に関する研究の一連のものである。

参考文献

- (1) 南真己：大学一般体育シーズンコースの自我概念の変化に及ぼす影響，東京教育大学体育学部紀要，12巻，143-148，1971.
- (2) 野沢巖：一過性組織キャンプ，継続性組織キャンプについての実践的研究，埼玉大学教育学部研究紀要，24巻，37-48，1976.
- (3) 川村協平・他：組織的キャンプにおける自己概念の変化に関する研究，東京学芸大学紀要，31巻 209-218，1979.

- (4) 中込四郎・他：水泳実習の自己概念に及ぼす影響，北海道教育大学紀要，29卷，1号，17-28，1978.
- (5) 中込四郎・他：スキー実習の体験過程と自己概念の変化に関する研究，北海道教育大学紀要，29卷，2号，11-18，1979.
- (6) 井村仁・他：冒険キャンプ経験が中学生の自己概念に及ぼす影響，第32回日本体育学会発表
- (7) 長島貞夫・他：自我と適応の関係についての研究（I）Self-Differential 作制の試み，東京教育大学教育学部紀要，12卷，85-106，1965.
- (8) 長島貞夫・他：自我と適応の関係についての研究（II）Self-Differential の作制，東京教育大学教育学部紀要，13卷，59-81，1966.
- (9) 西平直喜：青年分析，大日本図書，13-18，1964.